



冗談

Abnormal system

六号校舎を出ると日差しがまぶしい。ちょっとクラっとしながら階段を下りていく。いつも思うのだけど、どうしてうちの学科だけ丘の上にあるんだろう。工学部の他の学科はみな正門のすぐそばにあるのに。

飯を食ったら図書館で仮眠しよう。そう思いながら学食へと向かう。その途中、土木の人たちが測量実習をしているのに出会う。測量実習は夜間できないから大変だな。

学食ではいつものテーブルで一雄がいつものようにカレーライスを食べていた。一雄が独りであるのは珍しいと思いながら、中華丼を選んで席に座る。

「早いな」

「いやいや、そっちが遅いんだから。もう一時半だよ」

一雄のカレーライスは三分の二位なくなっていた。

「徹夜したみたいだね」

「今出してきた。一雄はどうした」

「昨日のうちに仕上げて今日朝一で出したよ」

どうやったらそんな効率的に時間が使えるのだろう。一雄はいつも遊んでいるようにしか見えない。目の前の男は、ゆっくりとスプーンを口に運び、何回も咀嚼して満足したように喉を上下している。スローモーな動きの途中でぼくとの会話を楽しんでいるようだ。

「製図仕上げた後、合コンだったんだ」

「また行ったの」

「なんか立教の友達に頼まれて」

「いい子いた。いや、それより和美さんとはどうなった」

一瞬スプーンの動きが止まる。

「変な宗教に入っちゃってさ。フェードアウト」

「和美さんが」

「そう」

一雄はそれ以上その話題にはふれず、ぼくに製図実習のコンセプトを聞いてきた。

「市立図書館は地域の情報センターって役割を持たなきゃいけないと思うんだ。特に、お年寄りへの情報のかかわりって大切にしないと。従来は、お年寄りが情報に触れるには……」

「ストップ」

「なに」

「あのさ、今回の製図実習は、ハード面からのアプローチでしょ。そんなに気合い入れてどうすんの」

「いや、やるからにはソフト面からハードは成り立つんでしょ」

「もちろんそうだけど、今回はそこまで求められてないよ。ぼくは裕治が徹夜してる間に、人

生で大切なものをみつけたよ」

そう言うと、利之と待ち合わせしてるからと一雄は席を立った。

ぼくはテーブルに置かれた中華丼に集中し、がつがつと食べ始める。もう少しで完食という時、目の前を何かピンク色が通り過ぎた気がして顔を上げた。

そこには和美さんが笑っている。

「こんにちは。一雄見かけなかった」

ぼくには彼女が一雄から初めて紹介された時と違って見るようには見えなかった。

「えー、今日は見てないけど。探してるの」

「なにかさけられてる。ミドリ様の警告を伝えたいのに」

「ミドリ様……」

思わず聞いてしまったが、言葉を発した瞬間しまったと思った。

「ああ、裕治さんにはミドリ様の幸せをお伝えしましょう。ミドリ様は宇宙の大悟者です。どのような憂いや災いもミドリ様が発する言霊で全てが癒されるのです」

ぼくは彼女が話しているうちに中華丼を平らげ、腰を浮かした。

「そのような偉大なミドリ様を一雄は嘲笑し、無視したのです。それは許されるものではありません」

「あの、和美さんは本気でそんなこと思っているの。あんなに、一雄のこと好きだって言ったじゃない」

ぼくは浮かした腰をもう一度おろして聞いてみた。

「ミドリ様に出会う前の私は本当の私ではありませんでした。そして、私がどう思うかではないのです。ミドリ様の前では私などはいないのです。全てをミドリ様にゆだねれば幸せになります。裕治さんもミドリ様にお会いになりませんか」

これが洗脳というものなのだろうか。ぼくはトレイをも持って立ち上がった。もう何も言う事はない。

「一雄は人間ではなく、少しでも多くの子孫を残そうと手当たり次第にセックスをする単なるオスです。文化のかけらもない。ミドリ様はそんな存在はすぐにでも消してしまう方がよいと言っています」

背後で発せられた言葉に我を忘れてしまったのかもしれない。なぜそのような言葉を言う権利があるのだろう。

「君は何を言ってるのかわかってるの。そんな一雄を貶める言葉」

彼女は勝ち誇ったような笑みをみせてこう言った。

「冗談に決まってるじゃないですか。裕治さんはこんな冗談も分からない無粋な人間なんですか」

そう言いながら、くるりと振り返り、ゆっくりと学食を出て行った。

ぼくはそれがどういうことなのかも分からないまましばらくそこに立ち尽くしてしまった。

学食を出て、十一号校舎の脇を通り、図書館に向かう。まだムカムカした思いを引きづりながら、それでも、何か楽しいことを思い浮かべて先ほどの出来事をチャラにしようとしている自分がある。その時、遠くから鳴っているサイレンの音が大学に入ってくるのを感じた。何かあったのかなと思った瞬間。ジープンのポケットに入れていた携帯が揺れだした。取り出してみると、利之からの着信だった。